婦人と新社會

山田わか主筆

十一月號

戰爭を防止するものは輿論の力

◇ユートピヤと左傾病

◇女性の潜勢力

◇求愛の形式

參政權は從來の婦人の力の延長

毎月一回一日發行　第五十六號　大正十三年十一月一日發行

大正十三年十月廿三日印刷納本

東京婦人と新社會[illegible]發行

ユートピヤと左傾病

現代人を惱ましてゐる原因が二つある。そして其の一つは樂をしたい、働かずにうまいものを食べたい、贅澤がしたいと云ふことで、もう一つは性の滿足を充分に得たいと云ふことである。勿論これは過度な勞働及び過度な禁慾主義の反動ではあるが。

そして、其の惱みを癒してやらうと約束する、否、むしろ惱んでゐる人々を利用して自己滿足を得ようとしてゐると云つた方が適當かも知れない一階級の人間、則ち、革命家が現れると同時に一方にはあらゆる淫蕩的、肉感的な繪畫、小說、劇、活動寫眞、歌、及び、衣服が工夫されて性慾の衝動が煽り立てられてゐる。

が、慾を煽り立てられるばかりで、事實に於ては、民衆は其れ等を手に入れることが出來ない。不滿はいやが上にも大きくなつて行く。

それ等の惱みから現代人を救はうとする所謂一種の革命家の先づ第一の出しものは社會的ユートピヤである。そして、民衆は全く無批判的に其れに心を引きよせられる。

一體、ユートピヤは決して限定的ではない。それは實際を表したものでないから、其處に幾分のよりよき見込みがあるとすると、其の見込みは益々膨脹し延長する。そして、それが現實から遠ざかれば遠ざかる程人々の心をより多く惹くようになる。その見込み則ち希望が具體的の性質を失へば失ふ程、生き／＼とした形像をそなへて來る。そして、傍若無人な考へ方が設定され、大膽な思想、則ち、破壞主義に憧れるようになる。改造はあく迄も科學的でなければならな・が。

民衆のための黃金社會則ち『ユートピヤの設定』と云ふ言葉に誑されて、そして、「世界の勞働者よ團結せよ」との掛聲と共に其のユートピヤに走せ參ずると云ふのが今日の民衆の心理である。

これが左傾病と云はれてゐる。

戰爭を防止するものは輿論の力

世界平和、戰爭防止と云ふことは、今、世界に漲つてゐる希望です。實に、國際平和と云ふことは、今、至る處で論議されて居ります。どうしたら、戰爭を防止出來るかと云ふことに付て各國の人々が頭を惱ましてゐるのです。

で、軍備縮少と云ふことが議論ばかりでなく實行されたのでありますが、併し、二十ある軍艦が十五に減らされた處が、それで戰爭が防止されるものでないことは子供にも分つて居ます。

そこで、今の處では國際裁判所を設定して、爭ひを起した國と國とに對し仲裁裁判をしよう、それを强制的にしなければならないと云ふことが、ゼネヴアに於ける國際聯盟總會の問題になつたのですが、此の國際裁判所の問題は、今、始まつたものではなく、今より百年ばかりも前にベンザムが既に稱へて居ります。

世界平和を實現するための解決法を可なりに具體的に世界に發表した人は實に英國の功利主義哲

學の元祖と云つてよい此のジエレミー・ベンザムであります。ベンザムの平和論は彼の國際公法論の一部でありますが、其の平和論の冒頭に於て、戰爭の原因を注意深く解剖してあります。そして戰爭の原因は各國の元首の短見と利己主義であり、そして、其の利己主義は一國内の政治、宗教、貿易に對する誤まつた處置、並びに、外國に對する不誠實から外國の利益を無視する處にあると云ひ、そして、此の狀態を整理するためには、現に今存在してゐる國際關係を、並びに、異論の起り易い國際間の權利義務をはつきりと規定し公文にして置かなければならない。そして、一方には軍備を最少限度と爲し、凡ての植民地を獨立させ、同時に最も公平な國際裁判所の設定だと云つて居ります。

　そして、その國際裁判所の判決に對する制裁權は國際軍力がなくとも國際的輿論で充分だと云ひそして、ベンザムは其の輿論の制裁權の充分强い歷史的の例として一七八八年スイデンの王が露國に對して宣戰を布告した時のことを擧げて居ります。スイデンの國王が宣戰を布告しましたが、併し、軍隊と國民がそれに從ひませんでした。つまり、國民の輿論の力で戰爭と平和の運命が決せられたのです。

以來、今日迄の有力な世界平和論を擧げて見るならば、先づ「第一」には佛蘭西のサンピーアの實際政治を基礎とした平和論ですが、これは非常にシツカリした意見であるにも拘らず、文章が流暢でないために一般には讀まれなかつたと云はれてゐます。そして、ルソーのものは「民約論」を始め、皆、このサンピーアのものゝ書き直しだと云はれてゐます。

「第二」は、歴史哲學を基礎としたルソーの世界平和論、「第三」は前に云つたベンザムの正義を基礎とした平和論、そして、「第四」は、宗教と政治の提携を基礎としたウイリアム・ペンの平和論であつてそして、この四つの平和論を一つにまとめた平和論を出した人はキヤントです。

が、それ等の諸説は、皆、ベンザムの説と大同小異であると云はれ、そして、それ等の平和論がいつも危ぶまれるのは制裁權の薄弱と云ふことです。勿論、前にも云つた通り、その制裁權は輿論でよいと云ふのですが、私自身も、國際裁判の執行は輿論でいゝと考へてゐる者です、併し、その輿論なるものを造るに付ての議論がそれ等の平和論には附帶してゐない。

今の處では、何處の國にも其の輿論を造る機關がない。今の所謂輿論と稱せられてゐるものは國民の本當の輿論ではありません。誤まられてゐない眞實なる國民の輿論は今の新聞乃至今の所謂國

民大會では得られません。して見ると、世界平和論は各國民の眞實なる與論を造る機關の設定から始めなければならないと云ふことになります。

今迄の政治家も政治學者も民衆政治と云ふことに付ては隨分聲を大にしてゐますが、併し、其の民衆政治の始めであり終りである與論を造る機關に付て何とも云つてゐないのは妙なことだと思ひます。

要するに、今日の平和論、つまり、戰爭防止論もベンザムの主張の範圍を脫してゐないと云つてよいのですし、そして、國際裁判の制裁權は與論でよいのですが、併し、それは單なる與論ではなく國民の感情を正しく導き政府を動かし得る程の有力な與論でなければならない。それだけの强い與論があつて、そして、公平な國際裁判所が設定されゝば先つ或る程度迄は戰爭は防止されるわけです。

けれども、世界の與論を强くするには各國の與論が强くなければならず、各國の與論を强くするには全國民を基礎とした、つまり、全國民の意志を代表した與論でなければならず、全國民の意志を代表するには婦人の意志が加はつてゐなければならないのは勿論です。

世界平和論は此處から出立しなければ決して有効でありません。

そして、此處にもう一つ注意して置きたいことは、戰爭防止策としての國際裁判所が完全に設定された處が、要するに、それは單なる應急手段であると云ふことです。いはゞ、それは外部からの外科治療のようなもので、戰爭と云ふ病氣の要素は、さう云ふ手段によつて取り去ることの出來るものではない。人間がどうしても戰爭をしないと云ふような性質にならなければ完全に戰爭は無くなりません。

して見ると、國民の平和な心理狀態を造り出し、そして、國民の輿論の不足を補ふこと、そしてその輿論を造る機關の設定と云ふことが、これからの婦人の除に努力しなければならない仕事であります。

戰爭が絕對に防止出來るものであるかどうか、又、過去に於ける戰爭が今日の文明とどう云ふ關係があつたかに付て考へる時には戰爭觀は違つて來ますが、それは、又の機會に讓ります。

女性の潜勢力

婦人は全く男子の道具であり、奴隷であつたと言ふことは一般に認められてゐる事實であつて、其の奴隷の狀態から婦人を解放しようと云ふことが婦人問題並びに婦人運動の眼目となつてゐるのでありますが、そして、勿論、私も其の事實を認めて居るものでありますが、併し、表面に現れた處、つまり、形式は何であれ、實際に於て婦人の勢力が絶大に働いて居る處を私は觀察して居ります。

そして、それは家風と云ふものが先祖代々から定められてゐる家とか、又は、特別の事情がある家は別として、先づ、普通の家では、主人の身うちの者よりも主婦の身うちの者の方が其の家族の者と一層深い親しみを持つて居ると云ふことです。

主婦側の身うちの者は其の家の準家族であるかのようなふるまひをしてゐるに反して、主人側の身うちの者はどんなに尊敬され、又、親しみを見せられても、何となく隔りがあつて、要するに、

お客様と云ふ感じを取り去つてしまふことが出來ません。

私自身の兄の家に例を取りますならば、兄夫婦がまだ部屋住みで居つて、私の兩親が一家の中心である間こそ、其の家で生れた私共は自分のうちへ行つたような氣持ちで自由勝手なふるまひが出來ますが、併し、兩親が隱居して、兄夫婦が家の中心となつた場合には、私達は兄嫁に氣がねが出て來て以前のように勝手に何處の戸棚でも開けて出したいものを出し、食べたいものを食べると云ふことは出來なくなつて、つまり、お客様のようになつて、出して呉れたものを使つたり食べたりしてゐなければならぬようになります。これに反して、それ迄はお客様取り扱ひをされてゐた兄嫁の身うちの者は準家族のような態度になつて、つまり、兄の家の中心にピツタリ這入りこんで、家事を手傳つたり、其の外いろんなことをしてゐます。つまり、兄嫁が主婦の位置に座るや否や、たとへ、其のうちで生れた私共でも其の家の中心から離れてしまつて、其の代りに兄夫婦を中心とし兄嫁の身うちの者が其の中心を取り卷くようになるのです。

兄の家を物質的にも精神的にも離れさせられてしまつた私自身は、それでは、全く孤獨かと云ふとさうではありません。自分の生れた家とは全然離れてしまつても、今度は自分自身が一家を持つ

てゐる以上は自分自身が中心となつて自分自身の身うちの者を自分の周圍に引きつけてゐます。

其の外、何處のうちでも、其のうちへ全く打ちとけた氣持ちで最も足繁く群がり集つて來る者は妻の血族であります。夫が妻に對して絶大な權力を振つてゐるうちでも、妻は自分に許された權限內で、自分の血族を優待してゐます。つまり、其處に菓子が一つしか無ければ其れを半分づゝにしても自分の血族なら分けてやるが、主人の血族なら、そんなことをするのは失禮だと思ふのでせうが、其の失禮だと思ふ心は既に分けへだてがあるのです。一つの菓子を半分づゝにすると云ふことは本當に些細なことでありますが併し其處に非常な強い情愛があり、そして、この情愛が一切の者を支配する力であるのです。

一家を主宰する戸主の權利が主人にあり、一家を支へる經濟上の力が主人の手にあつて、子供を左右する親權が父親のみにあつて、妻は全く一家の道具のように見られて居るとした處が、それは單に表面だけのことであつて、事實に於ては、一家の中心は妻にあります。從つて、一家が明るくなるのも暗くなるのも妻の心一つによつて定められて居ります。

ですから、ウォードの云ふ女性中心說は學問上の言葉であるばかりでなく、又は、下級生物には

かりあてはめられた事實でもなく、實に、私共人間の今日の社會に、しかも、婦人の人格が全く無視されてゐる現在の社會に於ても、實際に行はれてゐるのであります。

大多數の婦人は自分に其れだけの勢力があることに氣付かずに居ました。無我夢中で、親から、又は夫からあてがはれた位置に盲從して全く無自覺な生活をして居ても、併し、一家並びに一族の中心となる程の勢力を持つて居るのですから、もし、凡ての婦人が其の勢力を自覺し、有識に、有益に、そして・正しく其の位置を利用するならば、女性の社會上の位置は求めずとも自然に向上して行くと私は考へて居ります。

求愛の形式

これを他の方面から、つまり、異性に對する女性の勢力と云ふ方面から、一つ考へて見ませう。何百年來、男は女を卑しめて生きて來ました。けれども、自分が卑しめてゐる其の女が無かつたならば第一自分と云ふ者が存在しなかつたこと、並びに、青年期に達すれば愛する女無しでは生きて居られないような氣持ちのある事實をどう致しませう。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

幼い時には一にも二にも母さん〳〵で母さんがなければどうすることも出來ないし、年頃になれば、戀人が無ければ生き甲斐が無くなると云ふ動かすことの出來ない自然の法則を、女を卑しむのが習慣である人は何と考へて居るでせう。

『あなた無しには生きて居られない……』とよく小説には書いてありますが、あれは決して小説家の誇張した言葉ではなく、實際にあることを寫したのだと私は思ひます。

一代の英雄が美人の前にひざまづいたいくつも〳〵の例を、今迄、人は、英雄でも女色には溺れることがあると云ふように、其れを人間の弱點として見ようとして居ました。

立派な男が自分の愛する女の前へひざまづいて『私はあなた無しには生きて居られない。私は喜んであなたの奴隷になる！』と言ふのは、これは男の弱點ではなく、つまり、人間の弱點の曝露ではなく、それは天の命令であると私は考へてゐます。

最も男性的な英雄が、最も女性美を發揮してゐる婦人の愛を得て、そして、人間として最も立派な子供を後へ殘せと言ふ天の命令であります。

女を男のおもちやであるように考へるからおもちやに頭を下げることは笑ふべきことのように思

へるのですが、併し、それが種族に奉公するための天の命令である、種族に盡す所以だと考へる時に、其處に嚴肅な氣分さへ起つて來ます。

求婚問題に付て或る人が『女も進んで求婚せよ。男が貰ひに來るのを待つて居るのは卑屈な態度だ』と言つた時に、(これは一度云つたことがありますが今の話によい例ですからもう一度云ひますが)私は、それに對して『いや、さうではない。向ふがどう思つて居るかも知れないのに求めて行けば恥をかくかも知れない。自分を求めて集つて來る男子のうちから最上なのを選むのが矢張り女性の威嚴を保つ所以だ。』と云ひましたが、とにかく、女は男のおもちやだ、男の道具だと云ふことを基礎觀念としてゐるから、英雄が美人の前にひざまづくのが人間の弱點と思へたり、女も進んで求婚せよと云ふような考へが起つて來るので、習慣は何であれ、形式は何であれ、事實に立脚して戀人としての女性を考へて見ると、女性の力は實に素晴しいものです。

婦女界十月號の批判會での貞操問題に付て、今迄、女の道と言ふものはあつたけれど、男の道と言ふものが無かつたこと、そして、男の道はこれから造らなければならないことを申しましたが、そして、皆樣が其れに贊成して下さいましたが、其の男の道を造るには男の方にも勿論努力して頂

かなければなりませんが、先づ、第一には婦人が女性としての威嚴を保つことに努力しなければならないのです。

異性を慕ふ心は女にも男にも同じようにあるのですが、併し、多くの場合、女の方が受け身であると言ふ事實は何を語つて居るでせうか？　普通これは男に權力があつて、女は其の權力に支配される位置に居るからであるように解釋されてあつたのですが、私はさうは思ひません。

配偶者としての異性を選む力を自然は女性に與へたのです。原則として女性は男性程、異性を求むる心が急でありません。異性を求むる心が急な男子が自分の目差す女の周圍に群がつて來ます。男程、急な慾望を持つてゐない婦人は、冷靜な心を持つて多くの男子のうちから最上の者を選む。それが、自然が女性に與へた選擇權であります。ですから、女性は其の選擇權をしつかり握つてゐて、自分を求めて來る多くの男子のうちから最も優秀なものを選まなければならない。女は斷じて男のおもちやになどなつてはならないと云ふ精神が、先づ婦人界に確立して、凡ての婦人が女性の威嚴を保つために努力するようになつた時に、それによつて男子は敎へられて行きます。

女性側に確固とした覺悟が出來、男子側が反省するやうになつた時に、貞操に關する男の道と云

ふものが築かれるのだと私は考へて居ます。

參政權は從來の婦人の力の延長

今のまゝの社會狀態でも、戀人としての女性、主婦としての女性の力は實に有力に働いてゐますけれども、悲しいことには、それは唯裏面に於てのみであつて、表面の事柄になると、其處には女性の手が屆かないと云ふような仕組みに今の社會はなつて居ます。

今日の此の社會を一本の樹にたとへて申しますならば、女性の力は其の樹の根の範圍内に限られてあつて、其の樹の根又は幹を害する障害物が其の樹の枝に引ツかゝつて居ても婦人は其處迄手を伸すことが出來ないと云ふのが今日の社會の實狀です。

今日迄の婦人論は男性模倣に出立して、外界の事柄にばかり心を奪はれて、つまり、樹の枝や花にばかり心を傾けて、其の樹を存在せしめてゐる隱の根を忘れて居ますので、私は過去十年餘りの間、世間の所謂女權擴張と云ふものに反對して來ましたが、實に、本當の意味の婦人論乃至婦人運動は、樹の枝や花にばかり氣を取られて樹の根を等閑にして全體としての樹の衰弱を來たすような

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

ことをしてはならないのです。つまり、全體としての社會を衰弱させ、貧弱にするようなことをしてはならないのです。

婦人參政權に致しましても、自分が女性であると云ふことを忘れ、家庭をないがしろにし子供をほうり出して置いて政治に熱中するようなことをしてはならない。

と同時に、私共婦人が社會と云ふ樹の根をどんなに大切に保護し育んでも私共婦人の手の屆かない樹の上で男子ばかりの政治に無茶なこと、亂暴なことをされてはならない。

婦人參政權の問題は此處から出立しなければなりませんが其の點に付て並びに政界に乘り出し得る婦人の資格、又は、家庭生活と政治生活に付ては次號に聊か述べて見ようと思つてゐます。

●●●お斷り。編輯後に書くつもりのものが書けなくなつて遺憾です。

本誌臨時定價表

一册	金十錢	送料五厘
六册	前金五十五錢	（送料共）
十二册	前金壹圓	（送料共）

雜誌代及郵稅は前金の事
御送金の際は振替貯金東京五三六八八番に御拂込みのこと
郵券代用は五厘切手にて一割增
廣告は御照會次第御相談いたします

大正十三年十月廿三日印刷納本
大正十三年十一月一日發行

東京市四谷區南伊賀町四一
編輯兼發行人　山田嘉吉

東京市牛込區山吹町一八九
印刷人　大杉直次郎

東京市四谷區南伊賀町四一
發行所　婦人と新社會
振替東京五三六八八

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN